



水道水のボトル商品化には、こんな理由がありました。

水道水をペットボトルにした商品が、全国の水道事業所100ヶ所以上で製造されています。

「東京水」東京、「はまっ子ぶどうし」横浜市、「ほんまや」大阪市、「柳都物語」新潟市、「湯浴み水（ゆあみすい）」別府市、などなど。

水道水ペットボトルは、最初は災害備蓄用にくらわれましたが、2004年頃からは、水道水の品質向上を訴える手段として販売されるようになりました。

しかし、この水商売は、あまり儲からないのだそうです。1.名古屋市では年間375m1ボトル24万本（150円）を出荷しますが「人件費を考慮すると、足が出るくらい」といいます。

それでも新規参入が後を絶たないのは、水道離れを防ぎたいからです。水道水の年間給水量は、12年前をピークに減少しています。



写真/東京都の水道水ボトル
『東京水』

一方、水道管や浄水場等の設備は、高度経済成長期（1955〜65年）に設置されたものが多く、更新や改良の時期を迎えています。

実際に老朽化した水道管のひびや破裂で、断水や床下浸水の被害が各地で発生しています。

岡山市の例では、40年以上経過した水道管の更新に毎年40億円、年間の水道料収入の約3割にあたる額が必要だといっています。

少子化で水道料を負担する人口が減っていくため、今後の水道料金の値上げは必至です。

将来の水道の供給確保のためには、ペットボトルやウォーターサーバーに頼るのではなく、浄水器などを使って、水道水を上手に使う工夫が必要になっていきます。

【1】
「東京水」について調べたデータがあります。
500mlボトル/1000円の内訳
水道水0.1円。 ボトル代45円。
運搬費15円。 塩素を抜く費用7円。
販売手数料30円。 ダンボール代3円。
合計100.1円です。

市販のミネラルウォーターも塩素を抜く費用・人件費・送料以外は、ほぼ同じだと思います。計算するとボトルウォーターの99.9%以上が水以外の費用だということがわかります。

【2】
東京大学生産技術研究所教授・沖大幹（おき たいかん）氏が、コラム「水の惑星の未来」で次のように書いています。

『上下水道・防水施設の更新問題』

地方財政が逼迫している今、現在の水資源・水防災施設を100年後にも健全に使い続けられるように今後更新できるかが懸念されている。水道協会の統計によると、水道事故は増えているという。

飛行機などは、部品や本体そのものに耐用年数が設定されており、点検整備と同時に、使用時間に応じて部品などの交換を行っている。それと同じように、上下水道にもコンクリート製の管、あるいはスチール管などにも耐用年数がある。

しかし、ほとんどの場合、実際には耐用年数を過ぎて、使われている場合が多い。壊れなければ交換を先延ばしにし、応急手当の連続でしか維持しなくなってしまうという事態に陥るおそれがある。

米国では、上水なら破裂して道路に水が噴き出したら修理をする、下水なら陥没して壊れた部分だけを修理するというようになってきているという報告を目にする。

将来、今と同じ日本の水供給施設を半分の人口で維持していくには無理がある。次世代の人々が安心して水を使い続けられるようにするためにも、上下水道を含めた水資源施設の更新・維持・管理計画を根本から考え直すときがきている。